

論文の要旨

論文題目	コーパスを利用したアスペクトを表す複合動詞の記述的研究
氏名	廖 紋淑
学位	博士（文学）
授与年月日	平成23年9月27日

本論文は、日本語の複合動詞（V1+V2型複合動詞）のうち、アスペクトを表す複合動詞「～始める」、「～続ける」、「～終わる/～終える」、「～切る」、「～尽くす」の前項動詞（V1）の特徴の違いについて分析したものである。従来これらの複合動詞は、個々のV2形式について論じられることはあっても、全体を通して論じられることはほとんどなかった。しかし、開始・継続・終了の各形式を通して見ることにより、それぞれのV2形式の特徴がより明らかになると考えられる。そこで本研究では、大規模コーパスとしてインターネットのWWWページを利用して、上記各複合動詞がいかなるV1を取りやすいかを調査した。その結果、これらの複合動詞のV1に関して従来指摘されてこなかった新しい言語事実を指摘し、それぞれの取るV1の特徴について詳細に記述した。また、コーパス調査の結果から特徴的なV1を100語抽出し、アンケートによって、日本語母語話者と（中国語を母語とする上級）日本語学習者に対してV1+V2結合意識調査を行った。その結果、学習者は動作動詞に比べて変化動詞の場合に母語話者との判断のずれが大きくなることや、「～切る」と「～尽くす」の判断が困難であることなどを明らかにした。論文は、序論の章と結論の章を含め、全部で8章から成り立っている。

第1章では、序論として研究の背景と目的について言及し、次の3つの研究課題を提示している。

① 各複合動詞のV1とV2の結合規則について

- ・ 先行研究の記述の不十分な点を指摘し、「～始める」、「～続ける」、「～終わる/～終える」、「～切る」、「～尽くす」のV1の特徴を見る。
- ・ 同じ動詞が「～始める」、「～続ける」、「～終わる/～終える」、「～切る」、「～尽くす」それぞれと共起する場合の特徴について見る。
- ・ コーパスからの大量の用例（Web検索の利用）を観察することによって得られた新しい言語事実について指摘する。

② コーパス調査と日本語母語話者アンケート調査の比較

- ・ コーパス調査による言語の「実態調査」とアンケート調査による母語話者の文法性判断の「意識調査」を行う。

③ 日本語母語話者アンケート調査と日本語学習者アンケート調査の違い

- ・ 母語話者に対するアンケート調査と日本語学習者に対するアンケート調査の違い

いを考察して、日本語教育上注意すべき点を明らかにする。

第2章では、アスペクトを表す複合動詞に関する先行研究について概観し、従来の研究では「～始める」、「～続ける」、「～終わる/～終える」、「～切る」、「～尽くす」の各 V2 形式について個別に研究されているものの、開始・継続・終了の各形式を通して見たものはほとんどないことを指摘している。そして、実際にコーパスを使って、開始・継続・終了の各形式を通して V1+V2 結合を見ることにより、各 V2 形式の特徴が明らかになることを示している。こうして本研究では、まずは工藤（1995）の「外的運動動詞」、「内的情態動詞」、「静態動詞」という動詞分類によって V1 を分けて見るものの、各 V2 形式との結合の仕方によってさらなる整理が必要であることを指摘している。すなわち、同じ外的運動動詞でも「読む」や「食べる」は「～始める」、「～続ける」、「～終わる/～終える」のいずれとも共起しやすいのに対し、「寝る」や「待つ」は「～始める」、「～続ける」とは共起しやすいこと、先行研究では心理動詞の類は終了点が不明確なため「～終わる/～終える」とは共起しにくいことが指摘されてきたが、同じ内的情態動詞の中でも「考える」や「祈る」は「～終わる/～終える」と共起しやすく、「読む」や「食べる」などの外的運動動詞に近い性質を持つことなど、本研究のように開始・継続・終了の各形式を通して見ることにより、先行研究の指摘を超えた新しい文法記述が可能となることを主張している。

続く第3章～7章は本論で、「～始める」、「～続ける」、「～終わる/～終える」、「～切る」、「～尽くす」の各 V1 の特徴について論じている。

第3章では開始を表す「～始める」について論じ、V1 は時間的に幅のある動詞と共起しやすく、「読む」、「降る」、「愛する」、「存在する」などの場合は当該行為・現象・感情・存在の開始を表し、「諦める」、「冷える」などの場合は当該変化の開始を表すことを指摘した。一方、時間的に幅のない動詞（いわゆる瞬間動詞）は事態が開始した瞬間に終了するため、時間的展開性を持ちにくく、一回的な事態の場合は「～始める」と共起しにくいことを指摘した。また、学習者は全般的に母語話者に近い許容度を示すが、「治り始める」、「冷え始める」、「分かり始める」、「飽き始める」など変化動詞において母語話者よりも許容度がかなり低くなる傾向があることを明らかにしている。

第4章では継続を表す「～続ける」について論じ、V1 は「温まる」や「沸く」のように進展性を持つ動詞に限られ、「死ぬ」のように進展性を持たない動詞では、反復相的な場合を除いて「～続ける」と共起しにくいこと、「存在する」、「居る」、「在る」のような存在動詞は一般的に時間的展開性を持ちにくいとされており、工藤（1995）では静態動詞に分類されているが、「～続ける」と共起して当該事態が終わらずに持続することを表すことを指摘した。また、学習者は全般的に母語話者に近い許容度を示すが、存在動詞においては母語話者よりも許容度がかなり低くなる傾向があることを明らかにしている。

第5章では終了を表す「～終わる/～終える」について論じ、V1 は「走る」や「食べる」のように意志動詞で時間的展開があり、「走る距離」や「食べ物/または食事時間」のように事態の終了点が意識されやすいものを取りやすく、同じ外的運動動詞でも、当該の事態

の終結を主体がコントロールしにくい「寝る」や「待つ」は「～終わる/～終える」とは共起しにくいことを指摘した。また、「降る」、「愛する」、「存在する」のような無意志動詞は「～始める」とは共起するが、「～終わる/～終える」とは共起しにくいこと、「祈る」、「考える」は工藤（1995）では内的情態動詞に分類されているが、主体の能動的な行為を表すという点では外的運動動詞に近い性質を持つため、「～終わる/～終える」と共起しやすいことを指摘した。また、学習者は全般的に母語話者に近い許容度を示すが、「治り終わる」の許容度を高く捉える（母語話者なら「治り切る」と言うのが普通）など、変化動詞での使用に困難が見られることを明らかにした。

第6章では限界達成による完結を表す「～切る」について論じ、V1は「食べる」や「走る」のように時間的幅のある行為を表す場合は当該行為を最後まで達成した（＝やり残さない）という行為の完結を表し、「諦める」、「冷える」、「分かる」のように変化過程がある動詞の場合は当該変化が最後まで完了した（＝変化し残さない）という変化の完結を表すこと、「知る」のように瞬間的で変化過程がない動詞とは共起しにくいことを指摘した。ただし、「死ぬ」のように一般的に瞬間的な事態といわれるものでも、「死のうとしてから死ぬまで」を一つの幅のある行為として捉える場合には「なかなか死に切れない」のように言えることを指摘した。また、学習者は母語話者に比べて「冷え切る」の許容度を低く捉えたり、「散り切る」の許容度を高く捉えたりするが、「～尽くす」に比べれば全体的に母語話者に近い許容度を示すことを明らかにした。

第7章では対象の消滅による事態の終結を表す「～尽くす」について論じ、V1は「食べる」、「調べる」、「知る」などの他動詞と共起しやすく、その場合、ヲ格で表される対象の消滅による事態の終結を表すこと、「遊ぶ」、「行く」など一部の意志的自動詞とも共起して、これ以上遊ぶことや行き場所がなくなるまで当該行為が十分に行われたことを表すことを指摘した。また、学習者は母語話者に比べて「治り尽くす」、「生かし尽くす」、「咲き尽くす」の許容度を高く捉えるなど、「～切る」との使い分けができていないことを明らかにした。

結論の第8章では、本研究の分析結果をまとめたうえで、アスペクトを表す複合動詞の研究においては個別のV2形式の分析のみならず、全体を通した分析が必要であることを主張している。また、本研究で行ったような大量のコーパスを用いることにより、従来気付かれなかった新しい言語事実を指摘し、より詳細な記述が可能となることを述べている。さらに、日本語母語話者と日本語学習者に対するV1+V2結合意識調査を行うことにより、外的運動動詞の場合も内的情態動詞の場合も、特にV1が変化動詞の場合に学習者の判断が母語話者とずれやすいことを示し、日本語教育に貢献する指摘を行った。